

東海の中世煮炊具

花木ゆき乃

1. はじめに

東海の中世煮炊具の研究は、平安時代から戦国時代にかけて伊勢地方に分布する扁平球状の鍋形土器を「伊勢型鍋」と名付け、古代の甕からの型式変遷と編年、分布について示した新田洋に始まる^①。その後、伊藤裕偉は、伊勢型鍋が伊勢国南部の南勢地域に集中的に分布し、鍋以外の小皿や羽釜、甕などにも南勢独自の形態があるとして、「南伊勢系土師器」という包括的な概念を提唱した^②。東海の土師器は器壁が薄いのが特徴で、胎土や形状の類似から南勢地域で作られた可能性が高い、と伊藤は指摘する。

鍋は、12世紀中頃から14世紀前半の中世前期に、南勢地域を中心に中北勢地域や尾張、三河、美濃、遠江、相模（鎌倉）や信濃、上総、下総にまで広く分布した。14世紀中頃から16世紀後半の中世後期は、中北勢や鎌倉で減少するが、新たに大和の宇陀や紀伊東部に分布する^③。

東海地方の中世煮炊具については、編年や形態変化などが盛んに論じられてきたが、どのように流通したのかなど、その消費に関しては明らかではない部分が多い。

そこで、本稿では、愛知県・岐阜県・三重県を対象に、煮炊具の消費について考える。ただし、三重県内では、伊勢国以外は愛知県や岐阜県と様相が異なり、例えば伊賀国は近畿と共通の様相を示すことが知られている。よって、今回の分析においては伊勢国のみを対象範囲とし、現津市以北を中北勢、津市より南を南勢とした。

2. 土師質煮炊具

器種分類 まず、形態の違いによって、土師質煮炊具を鍋と釜に二分し、鏝がないものを鍋、鏝があるものを釜とする。さらに、鍋と釜をそれぞれの形態の違いから細分し、慣用的な表現で呼ぶことにした（図1）。

鍋は、伊勢型鍋・内耳鍋・茶釜形鍋に大別した。内耳鍋は、半球形のもの、口縁部が「く」の字形に屈曲して外側に開くものの2種類がある。

釜は、羽釜・茶釜形羽釜に大別し、羽釜は形態から二つに細分した。北村和宏の分類^④に従い、鏝より下が最大径となるものをA類、鏝の部分が最大径となるものをB類と呼ぶ。北村はさらにそれぞれの羽釜を詳細に分類しているが、ここでは羽釜の最大径の位置のみを分類基準とする。

地域別器種構成 東海の煮炊具は、伊勢型鍋から他の器種へと変わるのが大まかな変遷である。煮炊具の中心だった伊勢型鍋が分布範囲を狭め、尾張や三河ではやがて

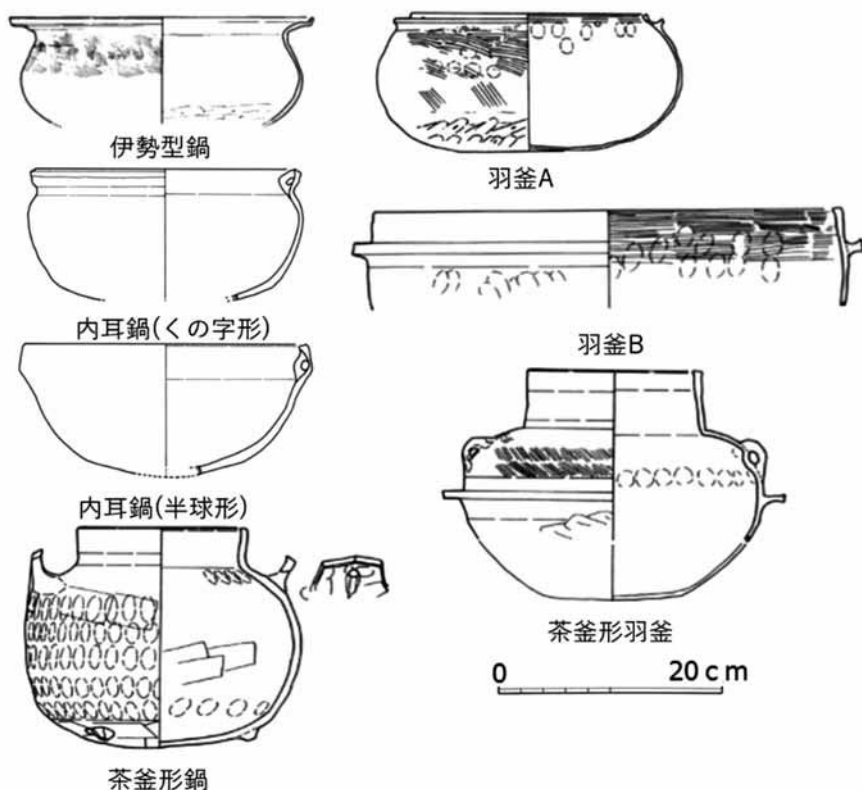


図1 中世煮炊具の器種分類

羽釜に移行していく。そのような中でも、南勢は依然として伊勢型鍋が主流だが、南勢以外の地域では羽釜が主流となり、三河や尾張では内耳鍋の生産も始まる⁶⁾。

器種構成の比率を地域別に示すと(図2)、南勢では伊勢型鍋が85%を占めるのに対して、中北勢は46%にとどまる。一方、羽釜は南勢では10%しかないのに対し、中北勢では43%を占める。出土遺跡は22例中16例が集落で、城館が3例、寺院や中世墓が3例、都市遺跡(港町)と生産遺跡が1例ずつである⁶⁾。遺跡の性格が異なることによる器種構成や出土量の違いはみられない。

尾張や三河では、伊勢型鍋は少なく、内耳鍋が半数かそれ以上を占める。出土遺跡は18例中9例が集落、8例が城館、国府と守護所が各1例である。

岐阜県では、土師質煮炊具の出土が三重県や愛知県と比べて少なく、資料数は乏しいものの、中世前期と思われる伊勢型鍋がわずかに出土しており、伊勢地域との交流があったと考えられる。

遺跡別の土器組成 次に、一定量以上の土器が出土した伊坂城跡(四日市市)と北畠氏館跡(津市)、島貫遺跡(津市)、麻生田大橋遺跡(愛知県豊川市)、南整理遺跡(岐阜県関ヶ原町)を取り上げ、遺跡ごとの土器組成について考える。伊坂城跡は比高約

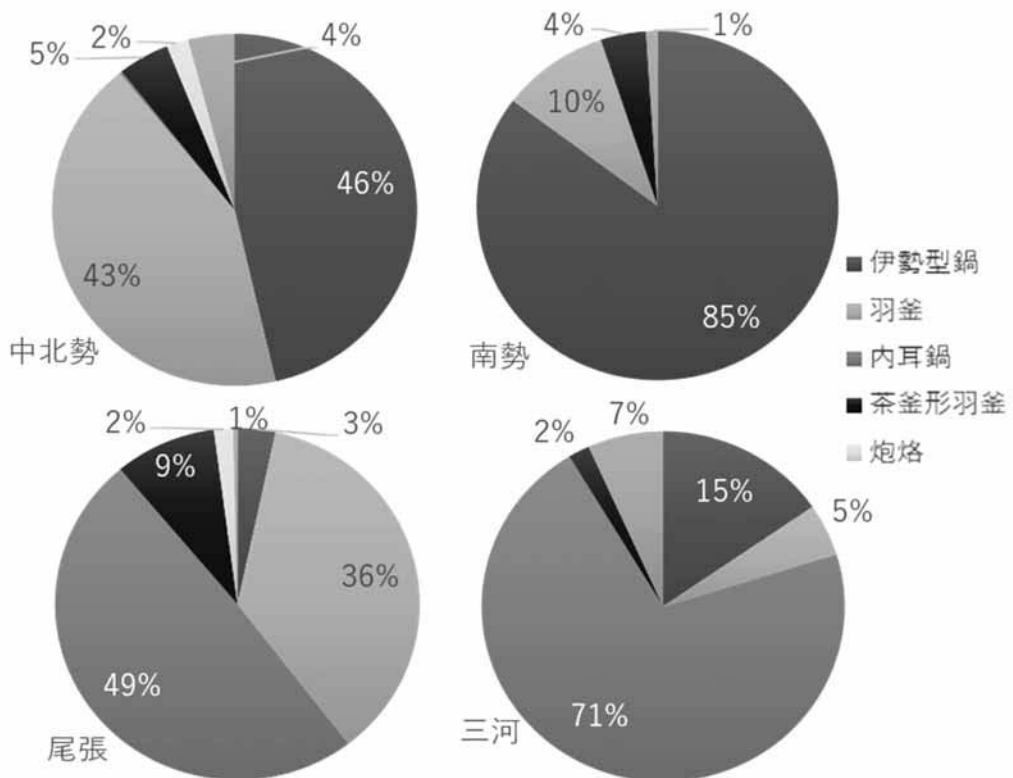


図2 煮炊具の地域別器種構成

40mの丘陵上に位置する戦国時代の城館である。15世紀後半から末に構築され、16世紀前半に最盛期を迎えた⁽⁷⁾。北畠氏館跡は、伊勢国司であった北畠氏の館跡である。館の造成時期は明確ではないが、15世紀前半には城下が形成され、織田氏の侵攻により滅亡する戦国時代末まで機能したと考えられる⁽⁸⁾。島貫遺跡には神宮領嶋抜御厨があり、街道沿いの宿場町としての機能も想定されている⁽⁹⁾。麻生田大橋遺跡は、縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である⁽¹⁰⁾。南整理遺跡がある関ヶ原町は、中世には野上宿として繁栄し、近世には中山道が整備された⁽¹¹⁾。

伊坂城跡では土師器が最も多く、瀬戸美濃製品と常滑製品がそれに続く。土師器では煮炊具が6割、皿類が4割を占める(図3)。羽釜や天目茶碗、鉢類、常滑の甕などの日用品が全ての区画で出土していることから、臨時的の防御施設ではなく、恒常的に機能していた防御施設と考えられる。

北畠氏館跡と島貫遺跡、麻生田大橋遺跡、南整理遺跡の器種別の比率は棒グラフで示した(図4)。「土師質煮炊具」は鍋と釜、「土師器供膳具」は皿、「土師器貯蔵具」と「陶器貯蔵具」は甕と壺、「陶器供膳具」は皿と椀、「陶器調理具」は播鉢、「磁器」は皿と椀、「瓦質土器」は瓦質の椀と皿を含む。なお、「陶器煮炊具」の出土はなかった。

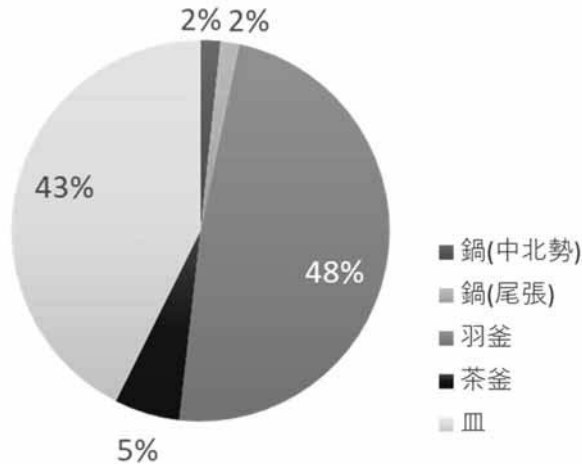


図3 伊坂城出土土師器の器種構成

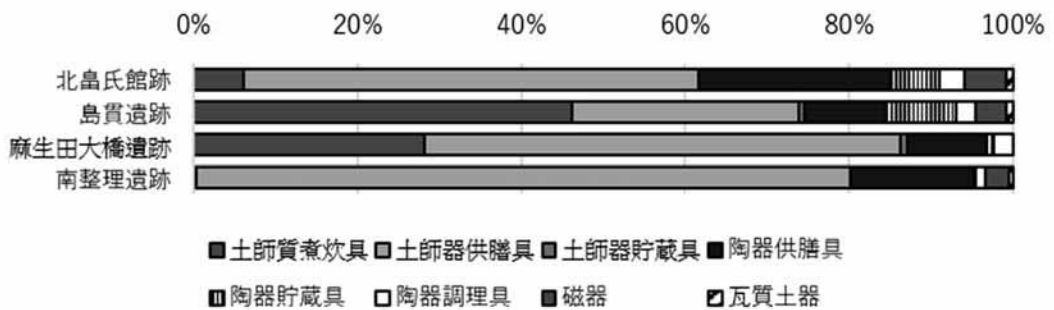


図4 遺跡別の土器組成

その結果、土師器が上記のどの遺跡でも全体の60%を超え、さらに北畠氏館跡と麻生田大橋遺跡、南整理遺跡では、土師器供膳具—いわゆる「かわらけ」—が最も多いことが判明した。かわらけは、儀礼や饗宴で用いられる使い捨ての皿との理解が一般的であり、かわらけを用いた何らかの儀礼や饗宴が行われたと考えられる。よって、かわらけが出土した上記3遺跡では、ある程度の規模で饗宴を催すことができる、経済的に裕福な階層が生活していたと推測する。また、麻生田大橋遺跡以外で磁器が出土していることは、磁器を所有できるような上位の階層の存在を示唆する。

島貫遺跡は神宮領のため、かわらけを用いるような宗教的儀礼の伝統が受け継がれ、遺物もかわらけが多いのではないかと考えていたが、かわらけよりも土師質煮炊具の方が多くことが明らかとなった。遺跡周辺は陸上交通の要衝として街道が整備され、京都の公家をもてなす施設があったと言われており、街道沿いの宿場町としての機能があったと想定される⁽¹²⁾。儀礼よりも日常生活の場としての役割が大きかったのではないだろうか。

器種別の口径 次に、煮炊具の器種による口径の違いについて検討する（図5）。

まず、麻生田大橋遺跡の「く」の字形内耳鍋は、口径23 cm以下が主流で、30 cm以上のものはない。半球形内耳鍋は口径24～31 cmのみであり、「く」の字形内耳鍋は半球形内耳鍋よりも小さめであることがわかる。生産段階から複数の規格の鍋を意図的に生産していたか、工人集団の違いを示している可能性が考えられる。

北畠氏館跡では、口径21 cm以下の伊勢型鍋が最も多く、36 cm以上のものはなかった。22～35 cmの口径の分布には、あまり差が認められない。それに対して、島貫遺跡の伊勢型鍋は、北畠氏館跡では見られなかった口径36 cm以上のものが最も多い。一方、羽釜は口径28～29 cmが最も多いが、ほとんどが22～31 cmの間に収まる。

伊坂城跡の羽釜は、口径23 cm以下に集中している。伊坂城跡と島貫遺跡で出土した羽釜は、どちらも中北勢系の羽釜と報告され、焼成前穿孔が認められる。これらは、同じ工人集団によって生産された可能性が高い。伊坂城跡と島貫遺跡の羽釜は、前者が小型で後者は中型のものが多いという差がみられるが、口径の違いは工人集団の違いを示すものではないと考えられる。おそらく、内耳鍋についても同様であろう。生産者側が規格の異なる製品を生産し、消費者側が必要に応じて選択したと思われる。

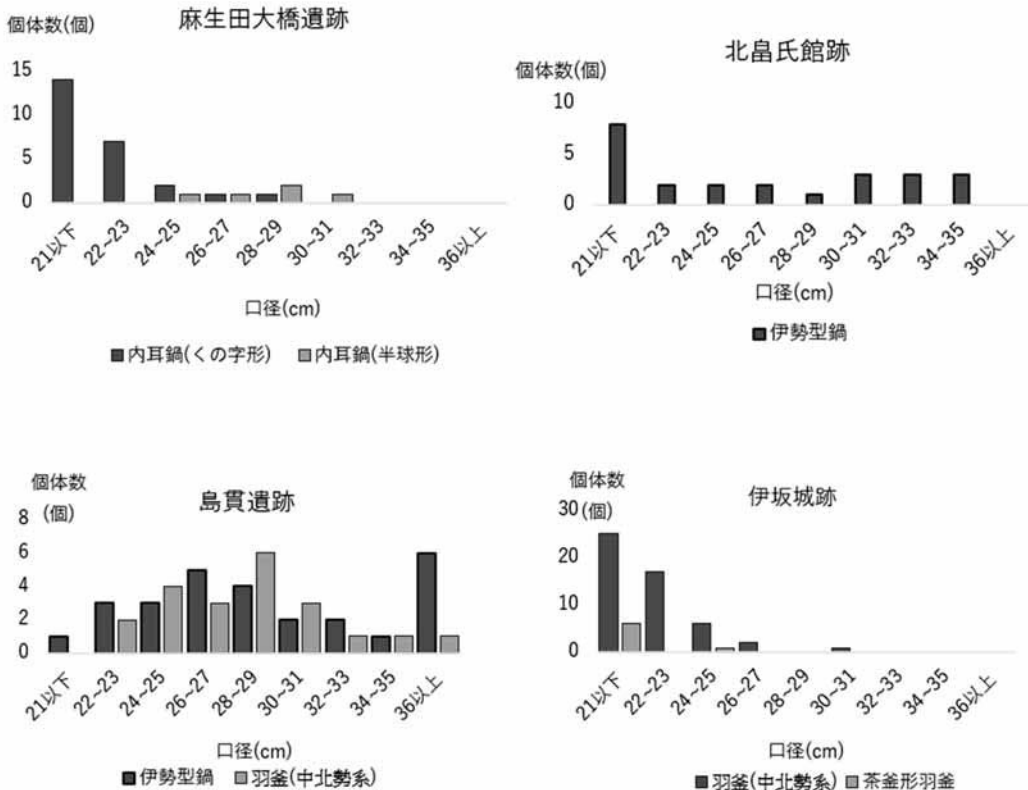


図5 器種別の口径

3. 鉄製煮炊具

土師質煮炊具は近世以降、鉄製の鍋や釜の普及によって淘汰されていった。鉄製煮炊具の普及には、戦国時代までのような刀剣や甲冑などの武器・武具の需要が減少したことが影響しているとされる⁽¹³⁾。鉄製煮炊具は実用性を重視し大量生産され、不特定多数の人々に供給された。それらは鑄造によって作られ、祭祀用や副葬用の青銅製鑄物と比べると装飾性は少ない。そして、破損すると回収して再利用されるため、発掘調査で出土した例は限られている⁽¹⁴⁾。

東海地方で鉄製煮炊具を出土した遺跡は10遺跡である(図6)。三重県では三宅西条城跡(鈴鹿市)で1例、多気北畠氏遺跡(津市)で3例、岩出遺跡群所り垣地区(玉城町)で2例、阿形遺跡(松阪市)で1例が確認されている。三宅西条城跡で出土した鉄製品は室町時代の遺物と考えられている。内径が26cmほど、外径が28cmほどの円環で、断面は1×0.5cmの長方形であり、用途不明と報告される⁽¹⁵⁾。鉄鍋の「つる」のように見えるが、断面が長方形となっていて持ちにくいのではないかも思われ、断定には至らなかった。

阿形遺跡では、室町時代後期の土坑から、土師器皿とともに、口径約50cmの鉄鍋が出土した。土師器皿は、口縁の大きさが同じようなものを何枚も重ねた形で出土し、口径10cm以上の大皿・8cm台の中皿・6cm台の小皿の3種類に分けられる。灯明皿として使用したと思われるススが付着したものが多く、墨書をもつものも含まれており、祭祀後の一括廃棄土坑と考えられている。鉄鍋も何らかの祭祀に使用された可能性がある。

愛知県では、清洲城下町遺跡(清須市)で2例、志賀公園遺跡(名古屋市)で1例、吉田城遺跡(豊橋市)で1例出土している。清洲城下町遺跡では、ススが付着した鉄製品が出土し、鑄造品の鉄鍋と推測されているほか、リング状の鉄製品も出土してい

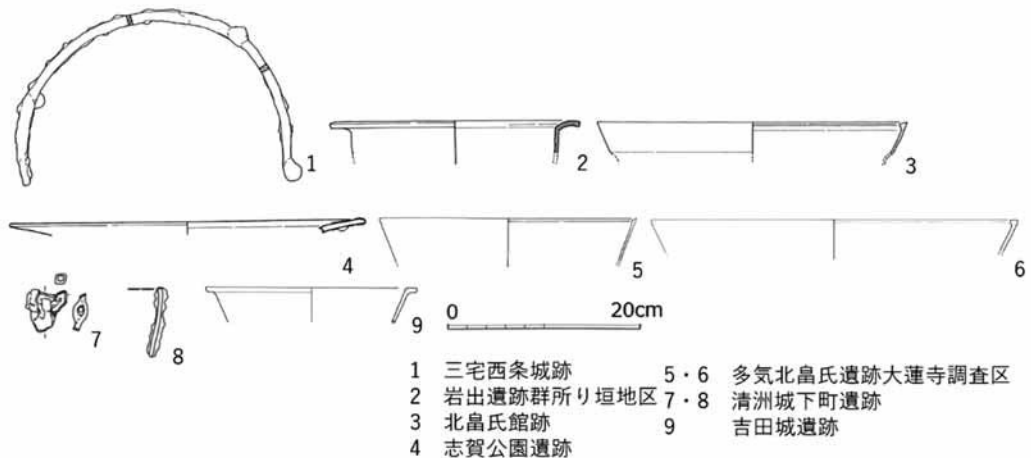


図6 東海の鉄製煮炊具

る。後者は半分欠損しているが、土師質内耳鍋の内耳に付き、吊して囲炉裏にかけるためのものと思われる⁽¹⁶⁾。

岐阜県では、穀見塚前遺跡（郡上八幡市）で 2 例、櫛原村平遺跡（揖斐川町）で 9 例、重竹遺跡（関市）で 1 例出土している。

4. おわりに

土師質製品に比べて高度な技術を必要とする鉄製品の生産には、土師質製品とは別の工人集団が関与したはずである。土師質煮炊具を鉄製煮炊具の補完品とみる従来の見解に従えば、鉄製煮炊具の普及が進んでいなかった時に、鉄製品の補完品として土師質の鍋や釜を使用した可能性がある。

全国的にみると、東北のほぼ全域と北陸、美濃と飛騨は、土製煮炊具がほとんど確認されない空白地帯となっている⁽¹⁷⁾。そうした土製煮炊具の空白地帯において、鉄製煮炊具の普及が進んでいたかどうかは明らかにできないが、筆者は、全ての土製煮炊具が単に鉄製品の補完的役割のみに終始していたと捉えるべきではないと考える。

実際、伊勢型鍋は、鉄鍋を模倣して作られたものではないと言われる⁽¹⁸⁾。伊勢型鍋が出土する地域では、鉄製煮炊具も一部で出土していることから、中世に鉄製品の導入が他の地域より遅れていたとは考えにくい。また、伊勢や尾張など土師質煮炊具が多く存在する地域では、器壁が薄く形態や大きさが様々な煮炊具が出土し、独自性と多様性を示している。土師質煮炊具は多量消費を前提としているとの見方もあり⁽¹⁹⁾、それらは、清浄性が求められる祭祀などの場で使い捨てることによって清浄性を示すなど、特殊な役割があったとも考えられよう。

註

- (1) 新田洋 1985 「平安時代～中世における煮炊用具―「伊勢型」鍋―に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1、三重考古学談話会。
- (2) 伊藤裕偉 1990 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』1、三重歴史文化研究会。
- (3) 伊藤裕偉 1992 「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』1、三重県埋蔵文化財センター。
- (4) 北村和宏は尾張の伊勢型鍋を分類し、山茶碗等との共存関係をもとに編年を行った（北村 1996）。尾張では 13 世紀後半に鏝が体部の最大径より高い位置につく羽釜（北村分類の羽釜 A）が出現し、伊勢型鍋と共に煮炊具の中心となった。しかし、15 世紀後半になると伊勢型鍋と羽釜 A が消滅し、茶釜形羽釜（同茶釜 A）と内耳鍋（同内耳鍋 A）、そして鏝の部分が土器の最大径となる羽釜（同羽釜 B）に変わるという。
- (5) 金子健一 2000 「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国～14・15 世紀の様相を中心に～」『研究紀要』8、瀬戸市埋蔵文化財センター。
- (6) 「集落」と「中世墓」、「寺院」と「集落」のように複数の性格をもつ遺跡あるが、重複

してカウントしているため、遺跡の合計とは合わない。尾張や三河も同じ。

- (7) 竹田憲治編 2003『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市市 JCT 建設事業に伴う伊坂城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 227-2、三重県埋蔵文化財センター。
- (8) 熊崎司 2015『多気北畠氏遺跡第 36 次調査報告 北畠氏館跡 11』津市埋蔵文化財調査報告 39、津市教育委員会。
- (9) 伊藤裕偉・川崎志乃 1998『嶋抜 第 1 次調査』三重県埋蔵文化財調査報告 174、三重県埋蔵文化財センター。
- (10) 安井俊則編 1991『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 21、愛知県埋蔵文化財センター。
- (11) 三輪晃三 2000『南整理遺跡』岐阜県埋蔵文化財センター調査報告書 57、岐阜県文化財保護センター。
- (12) 伊藤裕偉・川崎志乃 1998『嶋抜 第 1 次調査』前掲註 9。
- (13) 足立順司 1987「内耳鍋の研究」『研究紀要』Ⅱ、静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- (14) 五十川伸矢 1992「古代・中世の鑄鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集、国立歴史民俗博物館。
- (15) 三重県教育委員会 1983『三宅西条城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 61、三重県教育委員会。
- (16) 鈴木正貴ほか 2013『清洲城下町遺跡 XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 183、愛知県教育・スポーツ振興財団、愛知県埋蔵文化財センター。
- (17) 浅野晴樹 2003「東国における在出土器の生産と流通」『戦国時代の考古学』高志書院。
- (18) 伊藤裕偉 1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」前掲註 2。
- (19) 伊藤裕偉 1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」第 4 回東海考古学フォーラム『鍋と甕—そのデザイン—』東海考古学フォーラム。

挿図出典

- 図 1 伊勢型鍋：伊藤裕偉 1997『安濃津』三重県埋蔵文化財調査報告 147、三重県埋蔵文化財センター
羽釜 A：伊藤太佳彦 1999『馬引横手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 84 集、愛知県埋蔵文化財センター
内耳鍋：安井俊則編 1991『麻生田大橋遺跡』前掲註 10。
その他：鈴木正貴ほか 1994b『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 53、愛知県埋蔵文化財センター。
- 図 2 筆者作成。
- 図 3 竹田憲治編 2003『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市市 JCT 建設事業に伴う伊坂城跡発掘調査報告』前掲註 7 の図を一部改変。
- 図 4 筆者作成。
- 図 5 筆者作成。
- 図 6 1：足立順司 1987「内耳鍋の研究」前掲註 13。

- 2 : 稲本賢治 1992『近畿自動車道（勢和~伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告第 4 分冊蚊山遺跡所り垣地区』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター。
- 3 : 石淵誠人・伊藤裕偉 2002『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡 5』美杉村文化財調査報告 8、美杉村教育委員会。
- 4 : 永井宏章ほか 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集、愛知県埋蔵文化財センター。
- 5・6 : 伊藤裕偉 1993『多気遺跡群発掘調査報告 一志郡美杉村上多気所在』三重県埋蔵文化財調査報告 109、三重県埋蔵文化財センター。
- 7・8 : 五十川伸矢 1992「古代・中世の鉄鋳物」前掲註 14。
- 9 : 山田基ほか 1992『吉田城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 26 集、愛知県埋蔵文化財センター。

(はなき ゆきの 2018 年度大学院修了生)